

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

セル ガイド

- ① 祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ② 互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ ディポジションの分かち合いをします。
- ④ セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ① この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと？
- ② この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか？（または誉めたいですか？）1つだけ。
- ③ 聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか？
- ④ 互いの必要のために祈りましょう。

デーヴォ ガイド



2022.2.14-20

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ① お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。（2～3つ）
- ② 1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③ 礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い（なるべく短く）
- ④ 預言の祈り（主の御心を宣言して祈り）をします。

12:22 それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。

12:23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。

12:24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。

12:25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

12:26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。

12:27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして育つか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

12:28 しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくして下さることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。

12:29 何を食べたらいいか、何を飲んだらいいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。

12:30 これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたが

たの父は、それがあなたがたにも必要であることを知っておられます。

12:31 何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。

12:32 小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。

12:33 持ち物を売って、施しをなさい。自分のために、古くならない財布を作り、朽ちることのない宝を天に積み上げなさい。そこには、盗人も近寄らず、しみもいためることがありません。

12:34 あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるからです。

「だから…言います。」というのは、財産よりもいのちが大切であり、神の前に富む者となることが重要であるから…という前の内容を受けたものです。ここで「いのちのことで…心配するのはやめなさい。」というのは、肉体のいのちのことです。永遠のいのちがあるからこそ、「おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。」ということがあっても安心であり、また永遠の神の前に富む者になることもできるのです。

そして、「永遠のいのちとは神との永遠の愛の関係である」ということを考えれば、鳥やゆりよりも愛されている私たちが、地上にあっても安心なのだと分ります。主に全くゆだねてほしいようなのです。

主の働きのためには自分は豊かになりたいのだ…という人がいたとしても、主は「恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになる」と言っておられます。自分が富むことが主の働きの条件ではありません。むしろ、神を知っている者は「宝を天に積み上げ」ます。そこから主の助けが与えられ

るからです。

自分の人生も、教会も、教会の小グループも、天に宝を積み上げましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





12:35 腰に帯を締め、あかりをともしていなさい。

12:36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。

12:37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。

12:38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。

12:39 このことを覚えておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。

12:40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

12:41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえは私たちのために話してくださるのですか。それともみなのためなのですか。」

12:42 主は言われた。「では、主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な思慮深い管理人とは、いったいだれでしょう。」

12:43 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。

12:44 わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せようになります。

12:45 ところが、もし、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ。』と心の中で思い、下男

や下女を打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めると、

12:46 しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに合わせるに違いありません。

12:47 主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。

12:48 しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少して済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。

このたとえは主イエス様がやがてさばき主として地上に来られてときのことを意味しています。それは思いがけないときに来るので、常にその用意をしている必要があるということです。

主イエスの十字架を受け入れて救われたクリスチャンは、みなが平等で一律に報いを受けると早合点する人もあるかもしれませんが、実は違います。赦しと救いを全く同じように受けるとともに、報いの点では違うのです。天に宝を積むことやこの世での行いが違います。それとともに、「忠実な思慮深い管理人」であることも報いの違いを生み出すのです。

とは言え、神なる主は全知のお方ですから、その日まで私たちの行いが分らないということはありません。ですから主イエスがまだ来られなくても、私たちの今の備えは無駄ということはありません。”もしも今日主イエスが来られたら”という感覚を忘れずに生活する習慣を身に付けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



▶16日 水曜

ルカ

12:49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。

12:50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。

12:52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。

12:53 父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」

12:54 群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起るのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ。』と言い、事実そのとおりになります。

12:55 また南風が吹きだすと、『暑い日になるぞ。』と言い、事実そのとおりになります。

12:56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。

12:57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。

12:58 あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するよう努めなさい。そうでないと、その



人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、執行人は牢に投げ込んでしまいます。

12:59 あなたに言います。最後の一レプタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。」

この世は創造の神を無視するような価値観がまかり通っています。ですからそのままの状態です。平穩であったとしても、それは全体が減びに向かっているに過ぎません。しかも平穩に見えるのも一時であって、神を無視する価値観は人間中心ですから死への解決がなく、また人間はあくまでも自己中心ですから平穩は争いに変わってしまうのです。

つまり見かけの平穩は脆いものなのであって、イエス様はそのような平穩のために来られたのではありません。すなわち「平和を与えるために来た」のではないのです。むしろ神を無視する価値観の中では、神を信じて従う者がうとましい存在でしょうし、死の解決をいただいた者は理解不可能に見えるかもしれませんし、自己中心でない者は煙たがられるかもしれません。ですからイエス様は「むしろ分裂です。」と言われたのです。

私たちはそのことを恐れて、日和見的であって、本当に価値のある生き方を失ってしまうでしょう。今は福音が伝えられている恵のときですから「時代を見分ける」ときであり、また主が働いておられるときですから、「和解」のときです。

今は大丈夫…と脆い平穩に身を隠すのではなく、本当の価値、永遠の平和のためにリスクを恐れないうでいきましょう。全能の主権者であられる神は、そのような者のそばにいて助けてくださいます。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



13:1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。

13:2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」

13:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

13:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。」

13:5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。」

13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしが無い。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』

13:8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。』

13:9 もしそれで来年、実を結べばよし、それ

でもだめなら、切り倒してください。』」

神殿で殺された人々、また事故で死んだ人々に関しては、律法主義のユダヤでは罪のゆえにさばかれて死んだとの考えがありました。日本でも因果応報の考えがあって、そのような目で見られて苦しむ人々がいます。

イエス様はそのような人々のことを、「罪深い人たちだとでも思うのですか。… そうではない。」と、因果応報を否定なさいます。それはこの世の苦しみよりもはるかに、死後の「滅び」のほうが恐ろしいものだからです。この世で自分には苦しみが少ないから悪い因果はないんだと安心していても、後に来るさばきと滅びを憂いて悔い改める必要があるのだとも言えます。

真理は私たちを悪しき因果から解放しますが、それと同時に全ての人に平等に臨む神のさばきを認め、そして全ての人に平等に与えられた救いの招きに応答する必要があるのです。

招きに応答するとは、これまでの不信仰を悔い改めて、神へと方向転換することです。それには悔い改めの「実」を結ぶ必要があります。主が「実を取りに来たが、何も見つからなかった。」ということのないように、そして「切り倒」されることのないように、信仰の実を結びましょう。今はあわれみの時なのですから。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



13:10 イエスは安息日に、ある会堂で教えられました。

13:11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。

13:12 イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「あなたの病気はいやされました。」と言って、

13:13 手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。

13:14 すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを憤って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」

13:15 しかし、主は彼に答えて言われた。

「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどこき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。」

13:16 この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけませんか。」

13:17 こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。

13:18 そこで、イエスはこう言われた。

「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。」

13:19 それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」

13:20 またこう言われた。「神の国を何に比

べましょう。

13:21 パン種のようなものです。女がパン種をとって、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」

律法は神様の義を表すもので、それ自体は良いものです。しかし律法を守り通すことはできないので、律法によって救われる人は1人もなく、誰でもあっても律法の前には不完全な自分を嘆くことになるはずで

す。しかし当時の宗教の専門家、すなわち律法学者やパリサイ人、そしてこの会堂管理者もそれでは立場が守られないので、外面的や形式的に律法を守り、權威を保っていました。「安息日にはいけない。」というのもその表れです。

ところでイエス様が悪霊追い出しや癒しのわざをさなした目的は、旧約に預言されたわざを行うことによって御自身が救い主であることを明かにするためでした。つまり救いのわざであり、解放のわざです。

ここに律法による救いと、恵による救いの違いがあります。前者は不可能であり形式だけになります。後者は唯一の救いの道であり、形式ではなく愛によるわざです。「反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、…喜んだ。」とあるのは、この愛のわざのすばらしさに気づいたからでしょう。

私たちも律法主義、すなわち形式的、外面的な保身に陥っていないか省みる必要があります。恵に感じて、また応答して神様と交わって歩んでいるか、心を探ってみる必要があります。

それには立派なまたは偉大な信仰者になる必要は必ずしもありません。神の国、すなわち神の支配は私たちにいのちを与えますから、そのいのちが生きている以上、成長するのです。からし種のように小さくても、聖霊のいのちをいただければ必ず大きくなるのです。成長するものでありましょう。



①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



13:22 イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。

13:23 すると、「主よ。救われる者は少ないのですか。」と言う人があった。イエスは、人々に言われた。

13:24 「努力して狭い門からはいりなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、はいろいろとしても、はいれなくなる人が多いのですから。

13:25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください。』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない。』と答えるでしょう。

13:26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』

13:27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行なう者たち。みな出て行きなさい。』

13:28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちがはいつているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのは、

13:29 人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

13:30 いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

13:31 ちょうどそのとき、何人かのパリサ

イ人が近寄って来て、イエスに言った。

「ここから出てほかの所へ行きなさい。へロデがあなたを殺そうと思っています。」

13:32 イエスは言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きようと、あずとは、悪霊どもを追い出し、病人を直し、三日目に全うされます。』

13:33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありえないからです。』

13:34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

選民と自負していたユダヤ人たち、特に指導者であったパリサイ人や律法学者などは、自分たちが「大通りで教えて」もらったりまた教えたりしながら、ただ宗教的であることによって「救われる者」と信じていました。しかしながらイエス様は「門からはいりなさい。」と言われます。すなわち救われるには、定められた入り口（原文では単数）があるということです。

その入り口である「門」は「狭い」とイエス様は言われますが、現在世界で20億以上のクリスチャンがいることを考えると狭い感じはしないか

もしれません。しかし個人的に考えれば、その入り口は決して楽なものではなく、覚悟の要る「狭い」ものと考えてよいでしょう。

イエス様もその救いのためにエルサレムで死ぬ覚悟で進まれました。覚悟を持って信仰の道を歩みましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたの中の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





14:1 ある安息日に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家にはいられたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。

14:2 そこには、イエスの真正面に、水腫をわずらっている人がいた。

14:3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか。」と言われた。

14:4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人を抱いて直してやり、そしてお帰しになった。

14:5 それから、彼らに言われた。「自分の息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるでしょうか。」

14:6 彼らは答えることができなかった。

14:7 招かれた人々が上座を選んでる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。

14:8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、

14:9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください。』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥をかいて、末席に着かなければならないでしょう。

14:10 招かれるようなことがあって、行ったなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『どうぞもっと上席にお進みください。』と言うでしょう。そのときは、満座の中で面目を施すことになりませう。

14:11 なぜなら、だれでも自分を高くする者

は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

14:12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。

14:13 祝宴を催すばあいには、むしろ、貧しい人、不具の人、足なえ、盲人たちを招きなさい。

14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」

安息日にイエス様がいやしを行うなら、批判の口実になると、彼らは待ち構えていました。自分の義を主張する人々にとっては、水腫をわずらう人は都合のよい餌としか思えなかったのでしょうか。しかしイエス様は彼を「抱いて直してやり」ました。何という愛でしょうか。単に体をいやすだけではなく、愛で包み込んで心までもいやされたのです。

私たちに対するイエス様の愛もこれと同じです。また主の安息日はこのようなものです。形式を守るのではなく、また主から離れて自分の都合を第一にするのではなく、イエス様の愛のわざを現実 にいただけるのです。

そのような価値観は神の国のものです。自分の都合や正当化を考えないで、ただ主のみこころのみを求めるといことです。もしかしたらそのような生き方、また日曜日は不安でしょうか。イエス様は自分で自分を満たそうとするのではなく、主によって満たしていただきなさいと言われます。すなわち、上席などの権威やお返しなどの利得を求めのではなく、主からそれらをしていただきなさいということなのです。

その神の国の価値観の原点が安息日(日曜日)の礼拝にあるのです。そのような命ある礼拝をささげましょう。また安息日に表わされるイエス様の愛に抱かれつつ、安心と希望で生きましょう。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたの中の部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

